Oracle® Enterprise Manager

System Monitoring Plug-in インストレーション・ガイド for Microsoft SQL Server

リリース 10（4.0.3.0.0）

部品番号 : B54820-01

2009 年 5 月

このドキュメントでは、まず Oracle System Monitoring Plug-in for Microsoft SQL Server の概要を説明し、次に、このプラグインでサポートされるバージョンの詳細、およびインストールの前提条件を示します。さらに、プラグインをダウンロード、インストール、検査および検証するための手順を説明します。

1 説明

System Monitoring Plug-in for Microsoft SQL Server は、Oracle Enterprise Manager Grid Control を拡張して、Microsoft SQL Server インスタンスを管理できるようにするためのプラグインです。このプラグインを Grid Control 環境にデプロイすることで、次の管理機能を使用できるようになります。

- SQL Server インスタンスの監視。
- SQL 認証と Windows の統合認証の両方のサポート。
- SQL Server インスタンスの構成データの収集および構成の変更の追跡。
- 監視対象メトリックおよび構成データに設定されたしきい値に基づくアラートおよび違反の表示。
- 収集データに基づいた豊富なレポートの提供。
- ローカル・エージェントまたはリモート・エージェントによる監視のサポート。ローカル・エージェントは、SQL Server と同じホストで稼働するエージェントです。リモート・エージェントは、SQL Server が稼働するホストとは異なるホストで稼働するエージェントです。

2 サポートされるバージョン

このプラグインでは、次のバージョンの製品がサポートされます。

- Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.3 以上。
- Oracle Management Agent 10.2.0.1 以上（Windows 版）。
- Microsoft SQL Server 2000、Microsoft SQL Server 2005 および Microsoft SQL Server 2008 の Standard、Enterprise および Workgroup エディション。詳細は次のとおりです。
  - Microsoft SQL Server 2000（32-bit）
  - Microsoft SQL Server 2005（32-bit）
  - x64 サーバーまたは Itanium ベースのサーバー上で稼働している Microsoft SQL Server 2005（64-bit）

ORACLE®

Copyright © 2009, Oracle. All rights reserved.

Oracle と Oracle のロゴは Oracle Corporation の登録商標です。Oracle Enterprise Manager は、Oracle Corporation の商標です。記載されているその他の製品名および社名はその製品および会社を識別する目的にのみ使用されており、それぞれ該当する所有者の商標です。

- Microsoft SQL Server 2008（32-bit）
- x64 サーバーまたは Itanium ベースのサーバー上で稼働している Microsoft SQL Server 2008（64-bit）

■ Microsoft SQL Server 2005 クラスタ : アクティブ / アクティブおよび アクティブ / パッシブ。

3 前提条件

プラグインをデプロイする前に、次の前提条件を満たす必要があります。

■ Oracle Enterprise Manager Grid Control の次のコンポーネントをインストールします。

- Oracle Enterprise Manager Grid Control 10.2.0.3 以上
- Oracle Management Agent 10.2.0.1 以上（Windows 版）

  10.2.0.1 のエージェントの場合、Oracle Bug#5587980 に対する個別パッチを適用します。詳細は、My Oracle Support および Oracle Bug#5587980 を参照してください。

  10.2.0.2 のエージェントの場合、Oracle Bug#5587980 に対する個別パッチを適用します。詳細は、My Oracle Support および Oracle Bug#5587980 を参照してください。

  エージェントは、SQL Server 2000、SQL Server 2005 または SQL Server 2008 と同じコンピュータ上にインストールする（ローカル・エージェント監視）か、SQL Server と異なるコンピュータ上にインストールする（リモート・エージェント監視）ことができます。

  プラグインのデプロイ先の Oracle Enterprise Manager 10.2.0.4 エージェントが Windows Vista/Windows Server 2008 マシンにある場合、Oracle Bug#6596234 に対する個別パッチを適用します。詳細は、My Oracle Support および Oracle Bug#6596234 を参照してください。

■ Windows の統合認証ベースの監視では、SQL Server 2000 で必要な最小バージョンは SQL Server 2000 Service Pack 4 以上です。

■ Microsoft SQL Server 2005 クラスタのローカル監視では、Windows HA（フェイルオーバー・クラスタ環境）での Grid Control エージェントの構成が必要です。詳細は、My Oracle Support のノート 464191.1 を参照してください。

■ admin 以外のシステム・ユーザーが SQL Server インスタンスのリモート監視を実行するには、アクセス権限が必要です。

- 詳細は、「ターゲットを監視するためのリモート接続の構成」を参照してください。

■ JDBC URL の一部として、IP アドレスもホスト名も使用できます。ホスト名がネットワークで一貫して解決されることを確認します。nslookup や traceroute などの標準 TCP ツールを使用してホスト名を検証できます。プラグインをデプロイする管理エージェントで次のコマンドを使用して検証します。

- `nslookup <hostname>`

  IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。

- `nslookup <IP>`

  IP アドレスと完全修飾ホスト名が返されます。

注意： JDBC URL に指定されるホスト名は、完全修飾名である（必ずドメイン名も含んでいる）必要があります。

- （SQL Server 2000 の場合）SQL Server の Windows Management Instrumentation（WMI）プロバイダをインストールし、有効にします。SQL Server のインストール CD にある setup.exe ファイルを実行して、サポートを有効にします。詳細は、8 ページの「Windows Management Instrumentation のインストールと有効化」を参照してください。

  `<CD_Drive>/x86/other/wmi`

- Windows Management Instrumentation サービスが実行中です。
- プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定し、検証します。詳細は、4 ページの「プラグインをデプロイする管理エージェントの構成」を参照してください。
- （Microsoft Windows で稼働するエージェントの場合）ユーザーの OS 権限（エージェントの優先資格証明で設定）が、次のいずれかのインストレーション・ガイドのジョブ・システムを Enterprise Manager で機能させるための資格証明の設定に関する項に記載されている要件を満たしている必要があります。
  - 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Microsoft Windows（32-bit）』
  - 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Microsoft Windows（64-bit）on Intel Itanium』
  - 『Oracle Database インストレーション・ガイド for Microsoft Windows（x64）』

  これらのガイドは、次の場所の Oracle Database ドキュメント・ライブラリのインストレーション・ガイドのセクションにあります。

  `http://www.oracle.com/pls/db102/homepage`

  注意： ユーザーに適切な権限を割り当てないと、デプロイに失敗します。

- SQL Server インスタンスの TCP/IP を有効にします。詳細は、「TCP/IP ポート情報の有効化と検索」を参照してください。
- SQL Server インスタンスで SQL 認証または混合認証を有効にします。詳細は、7 ページの「SQL 認証または混合認証の有効化」を参照してください。
- 固定サーバー・ロール sysadmin を使用して適切な DB ユーザーを作成します。

4 プラグインをデプロイする管理エージェントの構成

エージェントを構成するには、まず、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。また、プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定する必要があります。これを行うには、次の項の手順に従います。

4.1 ユーザーへの高度な権限の割当て

高度な権限を割り当てるには、次のようにします。

1. エージェントをホストするローカルの Microsoft Windows ノードで、エージェント・サービスを起動するユーザーがローカル管理者グループに属していることを確認します。そうでない場合は、追加します。
2. Windows の「ローカル セキュリティの設定」ツールを開き、エージェント・サービスを起動するユーザーに次の高度な権限を付与します。
   - オペレーティング システムの一部として機能
   - プロセスのメモリ クォータの増加
   - バッチ ジョブとしてログオン

- プロセス レベル トークンの置き換え

3. エージェント・サービスが稼働している場合は、再起動します。
4. Grid Control でホストとエージェントに対する優先資格証明を設定します。詳細は、4 ページの「優先資格証明の設定と検証」を参照してください。
   - 優先資格証明で設定する OS ユーザーは、ローカル管理者グループに属している必要があります。
   - この OS ユーザーは、次の高度な権限を持っている必要があります。
     - オペレーティング システムの一部として機能
     - プロセスのメモリ クォータの増加
     - バッチ ジョブとしてログオン
     - プロセス レベル トークンの置き換え

4.2 優先資格証明の設定と検証

プラグインをデプロイするすべてのエージェントで優先資格証明を設定するには、次のようにします。

1. Enterprise Manager Grid Control で、**「プリファレンス」**をクリックします。
2. 「プリファレンス」ページの左側のペインで**「優先資格証明」**をクリックします。

   「優先資格証明」ページが表示されます。
3. ホスト・ターゲット・タイプの対応するターゲット・タイプについて、**「資格証明の設定」**列からアイコンをクリックします。
4. ホスト優先資格証明ページの「ターゲットの資格証明」セクションで、プラグインをデプロイする管理エージェントが稼働しているホストのユーザー名とパスワードを指定します。
5. 資格証明の設定後、同じページで**「テスト」**をクリックします。テストが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。
6. プラグインをデプロイする管理エージェントに対して OS コマンド・ジョブを実行します。
   - Enterprise Manager Grid Control にログインします。
   - **「ジョブ」**タブをクリックします。
   - 「ジョブ・アクティビティ」ページで「ジョブの作成」リストから**「OS コマンド」**を選択し、**「実行」**をクリックします。
   - 次のページで必要な詳細を入力し、**「発行」**をクリックしてジョブを実行します。ジョブが正常に実行されたら、資格証明は適切に設定されています。

5 プラグインのデプロイ

前提条件を満たしていることを確認した後、次の手順に従ってプラグインをデプロイします。

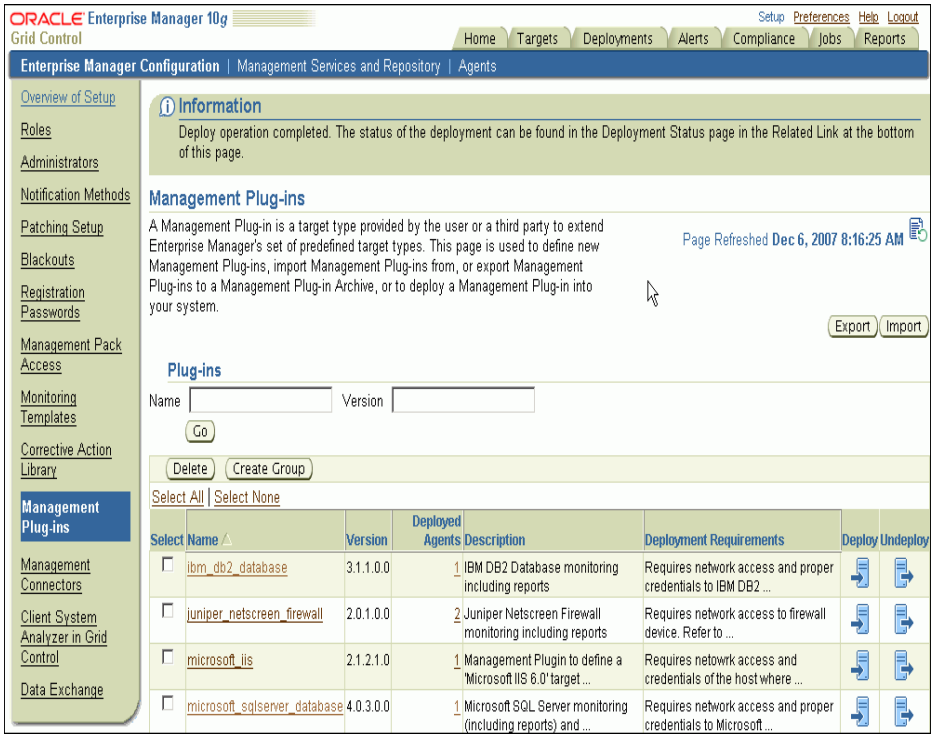
1. SQL Server プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network（OTN）からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある**「設定」**リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある**「管理プラグイン」**リンクをクリックします。
4. **「インポート」**をクリックします。

5. **「参照」**をクリックしてプラグインのアーカイブを選択します。
6. **「リスト・アーカイブ」**をクリックします。
7. プラグインを選択して**「OK」**をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明を設定したことを確認します。
9. 「管理プラグイン」ページで、SQL Server プラグインの**「デプロイ」**列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
10. **「エージェントの追加」**をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを 1 つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
11. **「次へ」**をクリックし、**「終了」**をクリックします。

    優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。

    エラーがなければ、次の画面が表示されます。

図 1　デプロイ成功時の画面



12. デプロイのステータスを確認するには、「関連リンク」に移動し、**「デプロイ・ステータス」**リンクをクリックします。

注意： Microsoft SQL Server 2005 クラスタのローカル監視を行う場合は、次のようにします。

- ローカル・エージェントを実行するクラスタの各ノードにプラグインをデプロイします。ローカル・エージェントは、クラスタの各ノードで稼働するエージェントです。仮想ホストにデプロイしないでください。
- 手順 8、9、10 および 11 を繰り返します。
- 仮想エージェント・サービスの `bin` ディレクトリに移動し、次のコマンドを実行します。

```
.¥emctl reload agent
```

この仮想エージェント・サービスのホームページで、**「追加」**ドロップダウン・リストにターゲット名**「Microsoft SQL Server」**がリストされていない場合は、ホームページをリフレッシュします。

---

6 TCP/IP ポート情報の有効化と検索

次の項では、TCP/IP ポートを有効にするため、および特定の SQL サーバー・インスタンスの TCP/IP ポートを探すために必要な情報について示します。

6.1 TCP/IP ポートの有効化

SQL Server 2000 の場合

1. SQL Server Enterprise Manager の左側のパネルで SQL Server インスタンスを右クリックし、**「Properties」**を選択します。「SQL Server Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「General」タブで**「Network Configuration」**をクリックします。「SQL Server Network Utility」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「Enabled」プロトコル・リストに TCP/IP がリストされていることを確認します。

SQL Server 2005 および SQL Server 2008 の場合

1. **SQL Server Configuration Manager** で、左側のパネルから**「SQL Server 2005 Network Configuration」**を選択し、SQL Server インスタンスに移動します。

   右側のパネルには、指定した SQL Server のすべてのプロトコルとそのステータスが表示されます。
2. TCP/IP が有効になっていることを確認します。
3. （TCP/IP が無効の場合）**「TCP/IP」**を右クリックして**「Properties」**を選択します。「TCP/IP Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。
4. 「Protocol」タブで、**「enabled」**を選択して**「Apply」**をクリックします。
5. SQL Server インスタンスを再起動します。

6.2 TCP/IP ポートの検索

TCP/IP プロトコルを有効にした後、SQL Server を再起動して変更を適用します。

SQL Server 2000 の場合

1. **SQL Server Enterprise Manager** の左側のパネルで SQL Server インスタンスを右クリックし、「**Properties**」を選択します。「SQL Server Properties」ダイアログ・ボックスが表示されます。
2. 「**General**」タブで「**Network Configuration**」をクリックします。「SQL Server Network Utility」ダイアログ・ボックスが表示されます。
3. 「**TCP/IP**」を選択し、「**Properties**」ダイアログ・ボックスをクリックして TCP/IP ポートを確認します。

SQL Server 2005 および SQL Server 2008 の場合

1. **SQL Server Configuration Manager** で、左側のパネルから「**SQL Server 2005 Network Configuration**」を選択し、SQL Server インスタンスに移動します。

   右側のパネルには、指定した SQL Server のすべてのプロトコルとそのステータスが表示されます。

   「**IP Addresses**」タブで、「IP All」の「TCP Dynamic Ports」行にインスタンスの TCP/IP ポートが表示されます。

7 SQL 認証または混合認証の有効化

データベース認証に対する権限を変更して SQL 認証または混合認証を有効にします。また、ターゲットの検出とジョブの実行に使用するデータベース・ユーザーに sysadmin ロールを設定します。

SQL Server で、次の手順に従い、ジョブの監視および実行に使用するユーザーに対して書込み権限を設定します。

注意： ユーザーがない場合は、作成します。これを行うには、タスク・バーから「スタート」に移動し、「**設定**」→「**コントロール パネル**」と選択します。コントロール パネルで「**ユーザーとパスワード**」をダブルクリックし、「ユーザー」タブで「**追加**」をクリックします。

---

1. コントロール パネルで「**管理ツール**」→「**コンピュータの管理**」とダブルクリックします。「コンピュータの管理」画面が表示されます。
2. 左側のパネルで「サービスとアプリケーション」に移動し、「Microsoft SQL Server」を選択して「セキュリティ」に移動します。
3. 「**セキュリティ**」をダブルクリックし、「**ログイン**」を選択します。
4. 「ログイン」を右クリックして「新規ログイン」をクリックします。「SQL Server ログインのプロパティ - 新規ログイン」ダイアログ・ボックスが表示されます。
5. 「**全般**」タブをクリックし、新規ログインの名前を指定します。「**SQL Server 認証**」を選択して、SQL 認証を使用してサーバーに接続する際に使用する一意のパスワードを指定します。
6. 「**サーバー ロール**」タブをクリックして「サーバー ロール」セクションで「**sysadmin**」が選択されていることを確認します。

7. **「データベース アクセス」**タブをクリックし、「データベース ロール内の権限」セクションでどのデータベースにもロールが選択されていないことを確認します。

関連項目： `http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/aa933458(SQL.80).aspx`

---

8 Windows Management Instrumentation のインストールと有効化

（SQL Server 2000 の場合）SQL Server の Windows Management Instrumentation（WMI）プロバイダをインストールして有効にします。SQL Server のインストール CD にある setup.exe ファイルを次のように実行して、サポートを有効にします。

```
<CD_Drive>/x86/other/wmi
```

9 権限の変更

次の場所から入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「権限の変更」での説明に従い、Windows Management Instrumentation コントロール権限、レジストリ権限および DCOM リモート・アクセス権限を変更します。

`http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html`

10 監視対象インスタンスの追加

次の手順に従って、集中監視および管理対象のプラグイン・ターゲットを Grid Control に追加します。

1. プラグインをデプロイしたエージェントのホームページで、**「追加」**ドロップダウン・リストから「Microsoft SQL Server」ターゲット・タイプを選択し、**「実行」**をクリックします。Microsoft SQL Server の追加ページが表示されます。

注意： Microsoft SQL Server 2005 クラスタのローカル監視を行う場合、エージェントのホームページは仮想エージェント・サービスのホームページです。

---

2. プロパティに次の情報を入力します。

   - **名前 :** SqlServer2k_Hostname など、Grid Control ターゲット全体で一意のターゲット名。これは、Grid Control での表示名です。この名前は、Grid Control 内のすべてのユーザー・インタフェースで、この SQL Server ターゲットを表します。
   - **JDBC URL:** JDBC の URL。

     例 :

     ```
     jdbc:sqlserver://<host>:<port>
     ```

注意： IP アドレス、ホスト名のいずれも指定できます。ただし、ホスト名がネットワークで一貫して解決されることを確認します。nslookup や traceroute などの標準 TCP ツールを使用してホスト名を検証できます。また、Microsoft SQL Server 2005 クラスタを監視する場合、クラスタの仮想 SQL Server の IP アドレスまたはホスト名を指定します。

- **JDBC ドライバ :** Microsoft SQL Server 2005 JDBC ドライバ・クラスの名前（オプション）。

  例 :

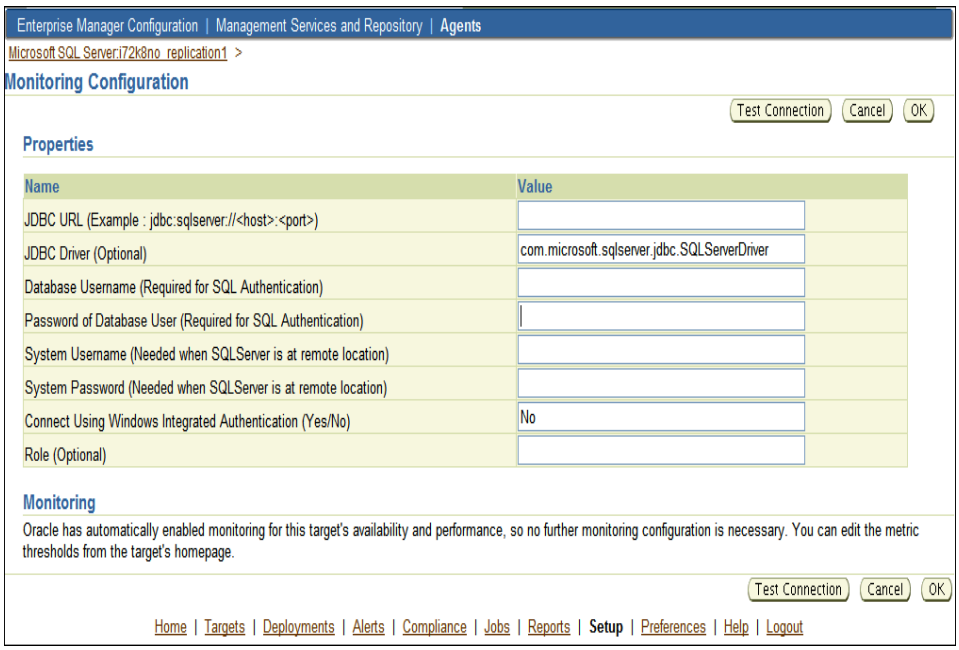
  `com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerDriver`

- **データベース・ユーザー名（SQL 認証で必須）:** 固定サーバー・ロール sysadmin でデータベースに対して有効なユーザー。
- **データベース・ユーザーのパスワード（SQL 認証で必須）:** データベース・ユーザーに対応するパスワード。
- **システム・ユーザー名（SQL Server がリモートにある場合に必須）:** 有効なホスト・ユーザー名。リモート・エージェント監視の場合のみ必要です。詳細は、「ターゲットを監視するためのリモート接続の構成」を参照してください。
- **システム・パスワード（SQL Server がリモートにある場合に必須）:** ユーザー名のパスワード。リモート・エージェント監視の場合のみ必要です。
- **Windows の統合認証を使用して接続**（Yes/No）: Windows の統合認証の場合は Yes、SQL 認証の場合は No。
- **ロール :**（オプション）

3. 「接続テスト」をクリックして、入力したパラメータが正しいことを確認します。
4. Oracle Management Service 10*g* リリース 3（10.2.0.3）以下では、接続テストが成功したら、手順 2 の暗号化されたパラメータを再入力して「**OK**」をクリックします。

注意 : Oracle Management Service 10*g* リリース 3（10.2.0.3）では、暗号化されたパラメータ（データベース・ユーザー名、データベース・ユーザーのパスワード、システム・ユーザー名、システム・パスワード）を再入力せずに「**OK**」をクリックすると、ログイン失敗を示す情報が表示される場合があります。

図 2　Microsoft SQL Server の追加



プラグインをデプロイし、環境内で監視する 1 つ以上のターゲットを構成したら、次はプラグインの監視設定をカスタマイズできます。具体的には、使用する環境の特別な要件に合せて、メトリックの収集間隔やしきい値の設定を変更できます。なお、1 つ以上のメトリックについて収集を無効にした場合、それらのメトリックを使用したレポートに影響が及ぶ可能性があります。

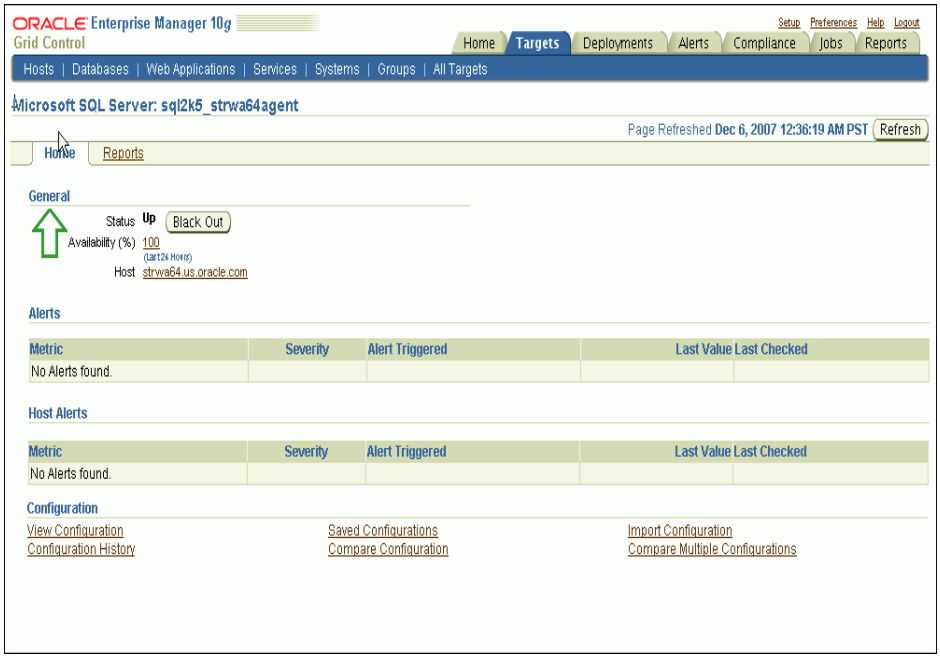
11 プラグインの検査および検証

プラグインでデータの収集が開始するまで数分間待機した後、次の手順を使用して、プラグイン・ターゲットが Enterprise Manager で適切に監視されていることを検査および検証します。

1. エージェントのホームページの「監視ターゲット」表で、「SQL Server」ターゲット・リンクをクリックします。

   Microsoft SQL Server のホームページが表示されます。

図 3　Microsoft SQL Server のホームページ



2. 「メトリック」表に、メトリック収集エラーが報告されていないことを確認します。
3. **「レポート」**プロパティ・ページをクリックして、レポートが表示されていること、およびエラーが報告されていないことを確認します。
4. 「構成」セクションの**「構成の表示」**リンクをクリックして、構成データが表示されていることを確認します。構成データがすぐに表示されない場合は、「構成の表示」ページで**「リフレッシュ」**をクリックします。

12 プラグインのアップグレード

プラグインをアップグレードするには、次の手順を実行します。

1. SQL Server プラグインのアーカイブを、ブラウザを起動しているデスクトップまたはコンピュータにダウンロードします。アーカイブは、Oracle Technology Network（OTN）からダウンロードできます。
2. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
3. Grid Control ホームページの右上隅にある**「設定」**リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある**「管理プラグイン」**リンクをクリックします。
4. **「インポート」**をクリックします。
5. **「参照」**をクリックし、アップグレード用にダウンロードしたプラグインのアーカイブを選択します。
6. **「リスト・アーカイブ」**をクリックします。
7. プラグインを選択して**「OK」**をクリックします。
8. プラグインのデプロイ先のエージェントすべてに優先資格証明が設定されていることを確認します。
9. より高いバージョンのプラグインをデプロイするエージェントに対して、Microsoft SQL Server ターゲットをブラックアウトします。必ず即時ブラックアウトを選択してください。
10. 「管理プラグイン」ページで、SQL Server プラグインの**「デプロイ」**列のアイコンをクリックします。管理プラグインのデプロイ・ウィザードが表示されます。
11. **「エージェントの追加」**をクリックして、プラグインのデプロイ先のエージェントを 1 つ以上選択します。ウィザードが再び表示され、選択したエージェントが表示されます。
12. **「次へ」**をクリックし、**「終了」**をクリックします。

    優先資格証明が設定されていないというエラー・メッセージが表示された場合、「プリファレンス」ページに移動してエージェント・ターゲット・タイプの優先資格証明を追加します。
13. ターゲットのブラックアウトを削除します（手順 9 を行った場合のみ必須）。

13 プラグインのアンデプロイ

プラグインをエージェントからアンデプロイするには、次の手順を実行します。

1. スーパー管理者として Enterprise Manager Grid Control にログインします。
2. **「ターゲット」**タブを選択して、次に**「すべてのターゲット」**サブタブを選択します。「すべてのターゲット」ページが表示されます。
3. Microsoft SQL Server プラグイン・ターゲットを選択して**「削除」**をクリックします。この手順は、特定のバージョンのプラグインのすべてのターゲットに対して実行する必要があります。
4. プラグインのデプロイ先のエージェントに優先資格証明が設定されていることを確認します。
5. 「すべてのターゲット」ページの右上隅にある**「設定」**リンクをクリックし、次に「設定」ページの左側にある「管理プラグイン」リンクをクリックします。「管理プラグイン」ページが表示されます。
6. Microsoft SQL Server プラグインの**「アンデプロイ」**列のアイコンをクリックします。「管理プラグインのアンデプロイ」ページが表示されます。

7. Microsoft SQL Server プラグインに現在デプロイされているエージェントをすべて選択して「**OK**」をクリックします。

   プラグインを Enterprise Manager から完全に削除するには、システムのすべてのエージェントからアンデプロイする必要があります。

8. 「管理プラグイン」ページで Microsoft SQL Server プラグインを選択して、「**削除**」をクリックします。

14 接続の構成

この項では、ターゲットの監視およびジョブの実行を行うための接続の構成について詳しく説明します。

14.1 ターゲットを監視するためのリモート接続の構成

リモート・エージェントを使用してターゲットを監視する場合、SQL Server ターゲットが存在するすべてのシステムで、次のセキュリティ構成を行うことをお薦めします。

- WMI 名前空間セキュリティの設定（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「Windows Management Instrumentation 管理権限の変更」を参照）
- リモート・コンピュータからレジストリへのアクセスの制限（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「レジストリ権限の変更」を参照）
- ユーザーがリモートからアクセスできるようにするための DCOM セキュリティの設定（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「DCOM リモート・アクセス許可の変更」を参照）
- システム・ユーザーが Windows パフォーマンス・カウンタにリモートでアクセスするための権限の設定（手順は次を参照）

  1. ローカルにエージェントをホスティングする Microsoft Windows ノードで、Windows の「**ローカル セキュリティ設定**」ツールを開きます。「**スタート**」メニューから「**コントロール パネル**」を選択し、「**管理ツール**」→「**コンピュータの管理**」→「**システム ツール**」を選択してから、「**ローカル ユーザーとグループ**」→「**グループ**」を選択します。
  2. システム・ユーザー名を「**Performance Monitor Group**」に追加します。

- ユーザーがリモートでコンピュータにアクセスできるようにするための、SQL Server サービスのアクセス権限の設定（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「SQL Server サービスのアクセス権限の変更」を参照）
- Windows の統合認証ベースの監視における Oracle Enterprise Manager エージェントでのターゲットのシステム・ユーザーに対する権限の設定

  1. ローカルにエージェントをホスティングする Microsoft Windows ノードで、Windows の「**ローカル セキュリティ設定**」ツールを開きます。「**スタート**」メニューから「**コントロール パネル**」を選択し、「**管理ツール**」→「**ローカル セキュリティ ポリシー**」を選択します。
  2. 「**ローカル ポリシー**」→「**ユーザー権利の割り当て**」をクリックします。
  3. ターゲットのシステム・ユーザーに次の権限を割り当てます。

     バッチ ジョブとしてログオン

- Windows ファイアウォールが SQL Server ターゲット・システムで有効な場合は、**Windows ファイアウォールでのリモート管理の例外を許可**を構成
  - Windows ファイアウォールを構成する手順については次のリンクを参照してください。グループ・ポリシー・エディタ（Gpedit.msc）の使用を含む手順に従ってください。

    `http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa389286(VS.85).aspx`

14.2 ジョブを実行するための接続の構成

ローカル・エージェントまたはリモート・エージェントを使用してジョブを実行する場合、SQL Server ターゲットが存在するすべてのシステムで、次のセキュリティ構成を行うことをお薦めします。

- WMI 名前空間セキュリティの設定（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「Windows Management Instrumentation 管理権限の変更」を参照）
- ユーザーがリモートからコンピュータにアクセスできるようにするための DCOM セキュリティの設定（『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』の「DCOM リモート・アクセス許可の変更」を参照）

構成の詳細は、次を参照してください。

- Microsoft のヘルプおよびサポートに関する Web サイト

  この Web サイトにアクセスするには、次の URL に移動します。

  `http://support.microsoft.com`

- 次の URL で入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』

  `http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html`

- My Oracle Support のドキュメント 367797.1

  ドキュメント 367797.1 を検索するには、次のようにします。

  1. 次の URL に移動します。

     `http://metalink.oracle.com`

  2. Oracle My Oracle Support ページの最上部にある**拡張**をクリックします。
  3. **ドキュメント ID** フィールドに「367797.1」と入力し、**「発行」**をクリックします。

15 ジョブの作成および編集

ジョブを作成および編集するには、次の手順を実行します。

注意： 現在、ジョブはスタンドアロンの Microsoft SQL Server インスタンスに対してのみサポートされています。Microsoft SQL Server 2005 クラスタ・インスタンスに対して発行されたジョブは失敗し、該当するエラー・メッセージが表示されます。

---

1. Grid Control で**「ジョブ」**タブをクリックします。Grid Control によって「ジョブ・アクティビティ」ページが表示されます。
2. **「ジョブの作成」**メニューからジョブ・タイプを選択し、**「実行」**をクリックします。

   次のいずれかを選択できます。

   - Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の起動
   - Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の停止
   - Microsoft SQL Server の一時停止または再開

   注意： ジョブを編集する場合は、リストから既存のジョブを選択して**「編集」**をクリックします。

   ---

3. 「*<Job Type>* ジョブの作成」ページの**「一般」**タブで、ジョブの名前を指定し、個々のターゲットまたは 1 つの複合ターゲット（グループなど）を追加します。

   注意： ジョブを編集する場合は、ジョブ名および選択したターゲットを変更します。

   ---

4. 「*<Job Type>* ジョブの作成」ページの**「パラメータ」**タブで、**「オプション」**メニューから、ジョブの開始時の動作として適切なオプションを選択します。

   次のいずれかのオプションを選択できます。

表 1　ジョブ・パラメータ・オプション

ジョブ・タイプ	使用可能なオプション
Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の起動	■ SQL Server および SQL Server エージェント・サービスの起動 （SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止している場合、あるいは SQL Server が実行中であるが SQL Server エージェントは停止している場合、このオプションを選択します。） ■ SQL Server サービスの起動 （SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止していて、SQL Server のみを起動する場合は、このオプションを選択します。）

表 1　ジョブ・パラメータ・オプション（続き）

ジョブ・タイプ	使用可能なオプション
Microsoft SQL Server または SQL エージェント（あるいはその両方）の停止	■ SQL Server および SQL Server エージェント・サービスの停止 （SQL Server と SQL Server エージェントが両方とも停止している場合、SQL Server が一時停止中であるが SQL Server エージェントは実行中の場合、SQL Server が実行中または一時停止中であるが SQL Server エージェントは停止されている場合は、このオプションを選択します。） ■ SQL Server エージェント・サービスの停止 （実行中の SQL Server エージェントを停止する場合は、このオプションを選択します。）
Microsoft SQL Server の一時停止または再開	■ SQL Server サービスの一時停止 （実行中の SQL Server を一時停止する場合は、このオプションを選択します。） ■ SQL Server サービスの再開 （一時停止中の SQL Server を再開する場合は、このオプションを選択します。）

選択した内容に従って、Grid Control によって SQL Server およびエージェントのサービスが起動されます。

注意： ジョブを編集する場合は、そのジョブのオプションを変更します。

5. 「*<Job Type>* ジョブの作成」ページの**「資格証明」**タブで、資格証明に適切なオプションを選択します。

   すでに設定されている優先資格証明を使用することも、新しい資格証明で優先資格証明を置き換えることもできます。いずれの場合も、エージェント・ホストとデータベース・ホストに対して資格証明を指定する必要があります。

   優先資格証明を設定するには、Grid Control コンソールの右上隅にある**「プリファレンス」**をクリックします。左側の垂直ナビゲーション・バーから、**「優先資格証明」**をクリックします。Grid Control によって「優先資格証明」ページが表示されます。このページで、優先資格証明を設定できます。

   注意： ジョブを編集する場合は、そのジョブの資格証明セットを変更します。

6. 「*<Job Type>* ジョブの作成」ページの**「スケジュール」**タブで、ジョブをスケジュールします。

   注意： ジョブを編集する場合は、そのジョブに設定されているスケジュールを変更します。

7. 「*<Job Type>* ジョブの作成」ページの**「アクセス」**タブで、このジョブに対する他のユーザーのアクセス権を定義または変更します。

   注意： 編集する場合は、そのジョブのアクセス・レベルを変更します。

8. **「発行」**をクリックしてジョブを作成します。

16 プラグインのトラブルシューティング

プラグイン使用時に発生する可能性のある様々な問題を解決するには、次の URL で入手可能な『Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in トラブルシューティング・ガイド』を参照してください。

http://www.oracle.com/technology/documentation/oem.html

17 ドキュメントのアクセシビリティについて

オラクル社は、障害のあるお客様にもオラクル社の製品、サービスおよびサポート・ドキュメントを簡単にご利用いただけることを目標としています。オラクル社のドキュメントには、ユーザーが障害支援技術を使用して情報を利用できる機能が組み込まれています。HTML 形式のドキュメントで用意されており、障害のあるお客様が簡単にアクセスできるようにマークアップされています。標準規格は改善されつつあります。オラクル社はドキュメントをすべてのお客様がご利用できるように、市場をリードする他の技術ベンダーと積極的に連携して技術的な問題に対応しています。オラクル社のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト http://www.oracle.com/accessibility/ を参照してください。

ドキュメント内のサンプル・コードのアクセシビリティについて

スクリーン・リーダーは、ドキュメント内のサンプル・コードを正確に読めない場合があります。コード表記規則では閉じ括弧だけを行に記述する必要があります。しかし JAWS は括弧だけの行を読まない場合があります。

外部 Web サイトのドキュメントのアクセシビリティについて

このドキュメントにはオラクル社およびその関連会社が所有または管理しない Web サイトへのリンクが含まれている場合があります。オラクル社およびその関連会社は、それらの Web サイトのアクセシビリティに関しての評価や言及は行っておりません。

聴覚に障害があるお客様の Oracle サポート・サービスへのアクセス

Oracle サポート・サービスに連絡するには、電気通信リレー・サービス（TRS）をご利用いただき、Oracle サポート（+1-800-223-1711）までお電話ください。Oracle サポート・サービスの技術者が、Oracle サービス・リクエストのプロセスに従って、技術的な問題を処理し、お客様へのサポートを提供します。TRS の詳細情報は http://www.fcc.gov/cgb/consumerfacts/trs.html を、電話番号のリストは http://www.fcc.gov/cgb/dro/trsphonebk.html を参照してください。

18 サポートおよびサービス

次の各項に、各サービスに接続するための URL を記載します。

Oracle サポート・サービス

オラクル製品サポートの購入方法、および Oracle サポート・サービスへの連絡方法の詳細は、次の URL を参照してください。

http://www.oracle.com/lang/jp/support/index.html

製品マニュアル

製品のマニュアルは、次の URL にあります。

http://www.oracle.com/technology/global/jp/documentation/index.html

研修およびトレーニング

研修に関する情報とスケジュールは、次の URL で入手できます。

http://education.oracle.com/pls/web_prod-plq-dad/db_pages.getpage?page_id=3

その他の情報

オラクル製品やサービスに関するその他の情報については、次の URL から参照してください。

http://www.oracle.com/lang/jp/index.html
http://www.oracle.com/technology/global/jp/index.html

注意： ドキュメント内に記載されている URL や参照ドキュメントには、Oracle Corporation が提供する英語の情報も含まれています。日本語版の情報については、前述の URL を参照してください。

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in インストレーション・ガイド for Microsoft SQL Server, リリース 10（4.0.3.0.0）

部品番号 : B54820-01

Oracle Enterprise Manager System Monitoring Plug-in Installation Guide for Microsoft SQL Server, Release 10 (4.0.3.0.0)

原本部品番号 : E14811-01

Copyright © 2009, Oracle. All rights reserved.

制限付権利の説明

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントが、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供される場合は、次の Notice が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations.As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007).Oracle USA, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、このソフトウェアを安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことに起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

Oracle は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよびドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても、一切の責任を負いかねます。